

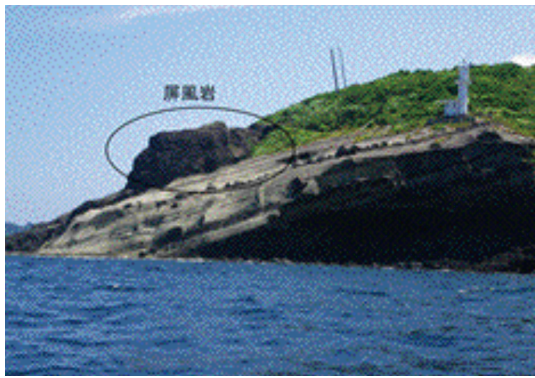
島根半島の神仏融合(四)

山本義孝

今回は少し広域に見てみよう。舞台は島根半島北側のほぼ中央部に位置する潜戸鼻と呼ばれる御崎(岬)先端に貫通した海蝕洞窟の加賀潜戸と神名火山と呼ばれる朝日山だ。

加賀潜戸は『出雲国風土記』に「加賀神埼」と記されるほど古くより著名な存在であるが、これを神仏誕生の岩屋として立体的に検討した研究はまだ見られないようだ。窟は「いわや」と読む。その意味するところは神霊が宿る岩の家「岩屋」であり、一般の洞窟と異なる点は、神霊の依り代となる生え抜きの岩や突起状の「石躰(せきたい)」が存在するところにある。これが無い場合には先端の尖った石を人工的に据えるのが一般である。さらに洞窟上部の形状は突起状になる場合が多く、私はこれを洞窟本体の「陰窟」に対して「陽石」と呼んでいる。神霊は岩屋上の陽石目がけて垂迹し、洞窟内の石躰に宿るという仕組みだ。

潜戸鼻は支佐加比売命の神霊が宿る聖地で、そこは南西から東北方向にかけて貫通した約二〇〇m、



海上より望む屏風岩



加賀潜戸から遙拝する神名火山(朝日山)

最大幅約九〇mの海蝕洞窟であり、北面も開口し三方向に開口部がある。西側入口を入ってすぐの北壁には壁面から生え抜きの「誕生石」と呼ばれる磐座があり、これが信仰の核心部である。誕生石は御子の佐太大神の神霊が神界から垂迹し宿った岩であるから、洞窟内は母神の胎内ということになる。

眼を転じて岩屋上部を確認すると、屏風岩という突起状の岩壁が海に向かって延びており、これが「陽石」に相当する。しかも南側の付け根部には、海の彼方より神霊を招くために目印となる常火(じょうび)「浄火」を火治吏(し)聖が焚き続けた痕跡と推定される岩の赤変部分が存在している。御崎は海の彼方から神霊を招く陸地の最先端で、ここで誕生した佐太大神のサダとは御崎そのものを指すと関和彦先生は指摘している。

しかし、御子神の神霊はそこには留まっていはいない。神霊は御崎先端から海越しに望まれる朝日山山頂で祀られ、最後に現在の佐太神社に迎えられ落ちてく。これは、海の彼方より招かれたばかりの荒魂が山の神として祀られることによって、その山が神奈火山となり、最後に山で鎮まった神霊が里に迎え



成相寺の僧形神像

られて里宮が成立するという循環が存在し、その後には聖や修験者と呼ばれる下層の宗教者、阿闍梨と呼ばれる密教僧の活動があり、その痕跡が部分的に残されている。

朝日山を見ると、山頂は三力所の峰から構成され中央の峰、東の峰の二峰が潜戸の御崎から直接見ることが出来る。この中間の鞍部上には山神を祀る祠があり、直下には観音菩薩を祀る「朝日観音堂」が設けられている。この観音は、はるかな海上から招かれた佐太大神が仏として顕れたもので、補陀落淨土のイメージと重なる。

東の峰からは、東方向に尾根稜線が2km以上延びており、その中間点に真言密教道場の古刹成相寺が、最先端には佐太神社が設けられるというように、これらは本来、神名火山(朝日山)の山岳信仰や山林修行を媒体として、お互いが深く結び付いた宗教施設群であり、朝日山の峰続きには如法経を埋納して結界を設定したと考えられる経塚山も見られる。

これらの中で私は特に成相寺の存在に注目している。なぜなら一二〜一三世紀の神像が二三軀も残されているからで、これを読み解くことで当時の信仰内容を伺うことができるからだ。これは成相寺鎮守の熊野権現社の神像であったが、内容を見ると大峯修験の主尊である蔵王権現像、吉野修験を推測させる騎馬神像があり、朝日山が修験道場であったことを示している。他には僧形の神像が座像四軀、立像一軀の計五軀も含まれることで、神が菩薩行を行う姿を顕している。

古密教の伝播により奈良後期から僧侶による神祀りが積極的に行われて神仏の融合は始まり、天台・真言密教の地方伝播により両者の関係は整理される。島根半島の神仏融合は意外と早くに始まっていたのである。